

「これからの学力は何か」OECD(経済協力開発機構)が何年もかけて大調査した結論...このキーコンピテンシーです。是非お読み下さい。

林 明夫

OECD 編「キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして」

明石書店 2006年5月31日刊を読む

キー・コンピテンシーとは

コンピテンシーの3つのカテゴリー(キー・コンピテンシーには次の3つのカテゴリーがあります。<林>)

カテゴリー1 相互作用的に道具を用いる(能力)

(1)グローバルな経済や情報社会の社会的専門的な需要として求められているのは、コンピュータのような物理的な道具(tool)と同様に、言語、情報、知識といった相互作用のための社会文化的な道具の熟達である。

(2)相互作用的な道具の活用において求められるのは、(たとえば、文章を読む、ソフトウェアを使用するなどのように)それを使いこなすために必要な技術的なスキルとその道具を自由に使うこと以上のものである。人々には、知識や技能を創造し、応用することが期待されている。求められているのは、道具それ自体に親しむこととともに、人が世界と相互作用する方法を道具がどのように変化させるか、またいっそう大きな目標を達成するためにどのようにいつも使うことができるかを理解することである。この意味で、道具は、単なる受動的なメディア装置ではなく、その人のまわりの環境とその人が積極的な対話を行う装置なのである。

(3)各個人は、認知的、社会文化的、物理的なツールを通して世界と出会う。この出会いはさらに、個人がどのように意味を理解し、世界で有能となり、変容や変化に対応し、長期的な挑戦に応える方法を形作っていく。相互作用的なツールの活用は、個人が世界を知覚し、世界と関係を作る方法という点で新たな可能性を広げる。

(4)現在の国際的な調査、特に PISA と、カナダ統計局によって行われてきた成人のリテラシーとライフスキル調査(ALL)は、書かれた文章のように相互作用できる能力に関するキー・コンピテンシーの特徴についての経験的証拠を提供してくれる。

必要な理由

- ・ 技術を最新のものにし続ける
- ・ 自分の目的に道具を合わせる
- ・ 世界と活発な対話をする

コンピテンシーの内容

- A 言語, シンボル, テキストを相互作用的に用いる
- B 知識や情報を相互作用的に用いる
- C 技術を相互作用的に用いる

——コンピテンシー 1A：言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる能力

このキー・コンピテンシーは、さまざまな状況において、話して書くと言った言語的なスキルや、コンピュータまたは図表を用いるといった他の数学的なスキルを有効に利用するものである。これは、社会や職場でよりよく働き、他の人々との効果的な対話に参加するための必須の道具である。「コミュニケーション能力」や「リテラシー」という用語は、このキー・コンピテンシーと関係する。

PISA の読解力 (reading literacy) と数学リテラシー (mathematical literacy)、および ALL で定義された計算リテラシー (numeracy) は、このキー・コンピテンシーを具体化したものである。

——コンピテンシー 1B：知識や情報を相互作用的に用いる能力

(1) サービスおよび情報産業分野の役割の増大と、現代社会における知識管理の核心的役割は、知識と情報の相互作用的な活用能力を人々にとって不可欠なものにしている。

(2) このキー・コンピテンシーに必要なのは、情報そのものの性質、つまり、その技術的基盤や社会的、文化的、思想的な背景と影響についてのよく考える力である。情報能力は、選択肢の理解、意見の形成、意思決定や情報に基づき責任をもって行ういろいろな活動の基礎として必要なものなのである。知識と情報の相互作用的な活用には次のことが求められる。

何がわかっていないかを知り、決定する

適切な情報源を特定し、位置づけ、アクセスする (サイバースペースでの知識と情報の収集を含む)

情報源に加えてその情報の質、適切さ、価値を評価する

知識と情報を整理する

(3) この具体的なキー・コンピテンシーは科学的にリテラシーであり、2006 年の PISA 調査の枠組みへと発展させている。生徒たちが科学的な探求活動にどれだけ進んで参加し交流しているかをこの調査では調べている。そこで求められるのは、認知的なスキルを用いる能力よりはむしろ、科学的な疑問にどれだけ関心をもっているかという点である。

——コンピテンシー 1C：技術を相互作用的に用いる能力

(1) 技術革新は職場の内外で新たな要求を個人に求めてきた。同時に、技術の進歩は、新しい違った手法でこうした要求に効果的に応じる新しい機会を人々に提供している。

(2) 対話などの相互作用に技術を用いることは、新しい手法に気づくことを私たち個人に求めるだけでなく、その手法を通じて、毎日の生活に技術を活用できることを示している。情報やコ

コミュニケーションの技術は次のような可能性を秘めている。たとえば、どこにいるかには関わりなく共に働く方法を変え、膨大な量の情報資源をたやすく利用できることで情報利用の機会を与え、いつもの場所にいながらにして世界中の人々とのつながりやネットワークを促進することで、他の人と対話する可能性である。そうした可能性を活かすためにも、単にインターネットや e-mail を使うのに必要とされる基礎的なスキル以上のものが人にはこれから求められるのである。

(3)他の道具と同じように、利用者が技術の性質を理解してその潜在的な可能性について考えれば、技術はいっそう相互作用的に用いることができる。もっと重要な点は、こうした技術的な道具に眠る可能性を人が自分たちの共通の実践の中に技術を組み込んでいくことであり、そうすれば技術への親近感を高めてその活用の幅をいっそう大きなものにしていくことができよう。

コンピテンシーの3つのカテゴリーの第2

カテゴリー2 異質な集団で交流する(能力)

(1)人生を通じて、人間は物質的・心理的に生存するためにも、そして社会的なアイデンティティの獲得という面でも、他の人々とのつながりに依存している。社会がいろいろな点でいっそう断片化し、多様化するようになってきている時に、個人間の人間関係をうまく管理することは、個人の利益からも新しい形の協力関係を作る上でもいっそう重要になってきている。既存の社会的な絆が弱められつつある時、強い絆を形作る能力をもつ人々が新しい絆を作りだすように、人間関係のような社会的資本の構築が重要なのである。

必要な理由

- ・ 多元的社会の多様性に対応する
- ・ 思いやりの重要性
- ・ 社会的資本の重要性

コンピテンシーの内容

- A 他人といい関係を作る
- B 協力する。チームで働く
- C 争いを処理し、解決する

(2)将来における不公平な資源配分の1つの可能性は、社会関係を作りそこから利益を得る能力がいろいろなグループで異なることだろう。

(3)このカテゴリーのキー・コンピテンシーは、他の人々と共に学び、生活し、働くことを個人に求める。「社会的能力」、「ソーシャルスキル」、「異文化間能力」、「柔軟な能力」といった用語に関係した多くの特徴にこのキー・コンピテンシーはあてはまる。

——コンピテンシー 2A：他人といい関係を作る能力

(1)その第一のキー・コンピテンシーは、知人や同僚、顧客との間で個人的な関係を持ち始めることから、それを維持し、管理する力である。良好な関係作りは、社会的な団結のためだけでなく、だんだんと経済的な成功の必要条件ともなっており、変化する企業や経済は情動的

な知能にも重要な価値を置くようになりつつある。

- (2)このコンピテンシーが仮定しているのは、人が自分がよいと感じる環境を創り出すためには他の人の価値観、信念、文化や歴史を尊敬し評価できるだけでなく、それらを取り入れて成長するということである。他の人々とうまく協力していく必要条件是次の点である。

共感性—他人の立場に立ち、その人の観点から状況を想像する。これは内省を促し、広い範囲の意見や思念を考える時、自分にとって当然だと思ふような状況が他の人に必ずしも共有されるわけではないことに気づく

情動と意欲の状態と他の人の状態を効果的に読み取る

—コンピテンシー 2B：協力する能力

- (1)多くの要求と目標は個人単独では対処することができないが、代わりに作業チームや市民運動、経営グループ、政党もしくは労働組合などのように、グループで力を合わせて同じ利害を共有する人々にはそうした要求や目標を求めることができる。
- (2)協力に必要なのは、個々人が一定の資質を持つことである。その個々人に求められるのは、自分自身の優先順序の中でグループを分け合い他者を支援することができなければならない。このコンピテンシーの特定の構成要素としては次のものがある。

自分のアイデアを出し、他の人のアイデアを傾聴する力

討議の力関係を解し、基本方針に従うこと

戦略的若しくは持続可能な協力関係を作る力

交渉する力

異なる反対意見を考慮して決定できる包容力

—コンピテンシー 2C：争いを処理し、解決する能力

- (1)家庭や職場、あるいはより大きな地域共同体や社会を含め、争いは生活のあらゆる局面で生じる。争いは社会的実現の一部であり、人間関係に固有の部分でもある。2人あるいはそれ以上の個人やグループが多様な要求、利害、目標あるいは価値観を理由に互いに対立するとき争いが生じる。
- (2)建設的な方法で争いに取り組む鍵は、争いを否定しようとするよりも、何かを行うための1つのプロセスとして争いを認識することである。そのために必要とされるのは、他方のニーズ

と利害を考慮しながら両方が利益を得られるような解決策の工夫である。
個人が争いを処理し解決する積極的な役割を担うために、以下の能力が必要となる。

できるだけ異なる立場があることを知り、現状の課題と危機にさらされている利害(たとえば、権力、メリットの認識、仕事の配分、公正)、すべての面から争いの原因と理由を分析する

合意できる領域と理由を分析する

問題を再構成する

進んで妥協できる部分とその条件を決めながら、要求と目標の優先順位をつける

コンピテンシーの3つのカテゴリーの第3

カテゴリー3 自律的に活動する(能力)

(1)自律的に活動するとは、社会的に孤立して働くことを意味するのではない。反対に、個人が、自分の社会的な関係や自分が果たしている役割と果たしたい役割といった自分の環境に気づくことが求められる。自分の生活と労働条件にわたる調整を行いながら自分の生活を意味あるものにして責任をもつことが人に求められるのである。社会の発展に効果的に参加し、職場や家庭生活、社会生活を含む生活のそれぞれの面でよりよく働くためにも、個人は自律的に活動しなければならない。その理由は、大勢に従うだけではなく、むしろ独立した自己を成長させ、選択を行う必要からである。そうすることで、人は自分の価値と活動について考えようとする。

必要な理由

- ・複雑な社会で自分のアイデンティティを実現し、目標を設定する
- ・権利を行使して責任を取る
- ・自分の環境を理解してその働きを知る

コンピテンシーの内容

- A 大きな展望の中で活動する
- B 人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する
- C 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する

(2)現代社会はそれぞれの人の立場が伝統的な社会の場合のように明確に定義されていないから、自律的に活動することが特に重要なのである。自分たちの生活に意味を与え、社会にうまく適応する仕方を決めていくためにも、個人的なアイデンティティを創り出そうとする。その1つの例を仕事にみるなら、1人の雇用者のもとで働くような安定した生涯にわたる職業などほとんどない。

(3)一般に、自律性を要求するのは、自分が果たしている役割と果たしたい役割、そして社会的関係といった自分の環境への気づきと将来への方向性である。しっかりした自己概念を持ち、意思を持った行為、つまり決定や選択、そして実際の活動に欲求や要求を置きかえる能力を、

この自律性は前提としている。

——コンピテンシー 3A：大きな展望の中で活動する能力

(1)このキー・コンピテンシーが個人に求めるのは、自分の行為や決定をいっそう広い文脈で理解し考える力である。つまり、自分たちが他のものとのどのように関係しているかを考慮すること、たとえば社会的なルールや社会的、経済的な組織、そして過去の起こった出来事との関係を考えることが求められる。人は、自分自身の行為や決定がこうした広い図のどこにどのようにあてはまるかを知る必要がある。

(2)たとえば、このコンピテンシーとしては次のようなものがある。

パターンの認識

自分たちが存在しているシステムについての理想を持つ(たとえば、その構造や文化、実践、公式・非公式なルールや期待、その中で果たす役割を理解し、法律や規則、また文書化されていない社会的規範や道徳作法、マナーや習慣を理解する)。こうした行為を制約する知識をもつことで権利についての理解を補う

自分の行為の直接的・間接的な結果を知る

個人及び共通の規範や目標に照らして起こりうる結果を考えながら、違う道に至る行為から選択を行う

——コンピテンシー 3B：人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する能力

(1)このコンピテンシーは個人の活動計画を考えるために役立つ。自分の人生をまとまった物語と見なし、バラバラになりがちな人生について、変化する環境の中でそこに意味と目的を与えることが求められる。

(2)このコンピテンシーの前提は、楽観主義と自分の可能性、そして実現可能な領域での堅実な土台をも含んだ将来への展望である。各個人に求められるものとしては次のようなものがある。

計画を決め、目標を定める

自分が利用できる資源と必要な資源を知り、現状評価する(時間、お金など)

目標の優先順位を決め、整理する

多様な目標に照らして必要な資源のバランスを取る

過去の行いから学び、将来の成果を計画する

進歩をチェックし、計画の進展に応じて必要な調整を行う

——コンピテンシー 3C：自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力

(1)このコンピテンシーは、高度の制度化された法的な事項から、個人的な利害の主張を含む日常的な事例にいたるまでの広い状況で重要となる。多くの権利や要求は法律や契約が作られ擁護されているが、他の人々のものと同じように個人がその権利や要求、利益を知って自ら評価し、また積極的に主張して守るのは、最終的には個人しだいである。

(2)他方、このコンピテンシーは、その人自身の権利や要求に関わるものだが、一方では集団のメンバーとしての権利や要求にも関係している。たとえば、民主的な団体や地方と国の政治活動への積極的な参加など。このコンピテンシーが求める能力としては次のものがある。

選挙などのように自分の利害関心を理解する

個々のケースの基礎となる文書化された規則や原則を知る

承認された権利や要求を自分のものとするための根拠を持つ

処理法や代替的な解決策を指示する

キー・コンピテンシーと生涯学習

(1)これまで述べてきた考え方は、学校で習得されるべきコンピテンシーと人生のそれぞれの段階で発達させるべきコンピテンシーに等しくあてはまる。学校を基盤とした調査研究にも成人のコンピテンシーの調査研究にもこの1つの枠組みを提供することができる。生涯学習という考え方の中心には、生活に関連したコンピテンシーのすべてを学校教育だけでは提供できないという主張がある。

(2)その理由は、以下のとおりである。

コンピテンシーは、生涯にわたり成長し変化する。年をとるにしたがって、コンピテンスを得ていく可能性と失っていく可能性を伴いながら

各個人への社会的要求は、技術や社会経済的な構造の変化の結果として成人の人生を通じて変化することが予想される

コンピテンスの発達、青年期だけで終わるのではなく、成人期を通じても継続することを発達心理学の研究が示している。特に、枠組みの中心となる、考える能力と思慮をもって活

動する能力は、成熟に伴って成長する

- (3) コンピテンシーの発達の理解は、教育と評価研究にとって重要な意味がある。人間の発達の進化的モデルは、成人教育の目的のための理論的な基礎を提供する。さらに、共通の一般的な基準に対して人生を通じての各個人のコンピテンシーを評価する説得力のある理由を提供するとともに、青年期と成人期にわたる首尾一貫した全体的な評価戦略のデザインを提供する。

P210 ~ 221

[コメント]

- (1) OECD の PISA(15 歳時の国際標準学力調査)の基底となっている学力観に 3 つの「キー・コンピテンシーズ」があります。この「キー・コンピテンシーズ」は学校時代だけでなく、生涯にわたって少しずつ自分なりの方法で身につけるべきものと考えます。仕事や社会活動、家庭生活、個人生活など人間の「人生の成功」と「正常に機能する社会」にとり必要不可欠な能力だからです。
- (2) この「キー・コンピテンシーズ」を身につけるためには、幅広い読書による熟慮、熟考、省察を重ね、「思慮深さ」を身につけること、及び「Learning To Learn ラーニング・トゥ・ラーン」つまり「学び方を学ぶ」スキル・能力が大切な条件として考えられます。
- (3) 私はこのキー・コンピテンシーズとその 2 つの前提条件を人間の大切な「宝物」、「知的資産」と考え、この世の中に住む一人ひとりが少しずつでもいいから、生涯にわたって身につける努力をしたらよいと考えます。

- 2009 年 7 月 7 日林明夫記 -